

家畜損害防止関連情報

◆子牛の風邪予防に晴れた日は換気を

生後1カ月前後から、今度は白痢ではない普通の色の下痢がみられる場合があります。飼料の食べ過ぎのこともありますが、これらのなかに「コクシジウム」という小さな寄生虫による下痢が最近よくみられます。重症例では血便になる場合もあり、獣医師による診断が必要です。

また、子牛の風邪は、肥育と繁殖の一貫経営の場合は生後1カ月ぐらいから、また繁殖牛の多頭飼育では冬に集団的に発病することがあります。いずれの場合も新しく牛を購入するなどの牛の移動や人間の出入りによって、原因となるウィルスや細菌が侵入すると考えられます。食欲がなくなったり、呼吸が早くなるなどの症状がみられたりしたらすぐに治療することは言うまでもありませんが、冬でも天気の良い日中は、戸や窓を開けて換気に努めましょう。導入牛は別飼いにしたり、不用意な人間の出入りにも気をつけたりしましょう。